

第5章 学生の受け入れ

1. 現状の説明

(1) 学生の受け入れ方針を明示しているか。

<1> 大学全体

本学では創立以来、基本理念である「自由と意力」に満ちた人材の育成を目指してきた。また、学則第1条は「本学は、広く造形芸術全般について高度な学理技能を教授研究し、あわせて国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育者研究者等を育成することを目的とする。」と規定している。これらを踏まえ、本学は学生の受け入れ方針を各学部や大学院ごとに、5項目で構成されたものをアドミッション・ポリシーとして定めている。

このアドミッション・ポリシーは入学試験の学生募集要項に明示され、ほかにも「大学案内」等印刷物や本学ホームページにて広く社会に向け公表している（資料5-1(一般入学試験) p.4ほか、資料5-2 p.95)。

これら基本理念やアドミッション・ポリシーの公表は入学後のミスマッチ防止に働きかけていると推察できる。

オープンキャンパスや地方会場を含む進学相談会、高校ガイダンスも以前より継続的に実施しており、受験生が実際に体感したり教職員と触れ合うことで、本学の受け入れ方針をより深く知ってもらう機会を提供している。

また、障がいのある受験生については、全種別の入学試験の募集要項に「受験上の配慮について」という項目を設け、受験時や入学後の配慮が必要な場合（緊急に配慮が必要な骨折等を含む）、提出された申請内容や診断書から判断し特別措置をとる対応をしている（資料5-1(一般入学試験) p.14ほか）。

<2> 美術学部

基本理念及び学則第1条を踏まえて作成された本学アドミッション・ポリシーは次のとおりである。上方から4項目までが大学共通となり、各最下行にそれぞれを特徴づける項目を記載している。

- ・芸術に対して広い視野を持つ人
- ・自由な発想を持つ人
- ・国際的に活躍する人
- ・想像力・表現力・審美眼を具えた人
- ・自ら、芸術を切り拓く意力のある人（美術学部のみ）

<3> 造形表現学部

造形表現学部は夜間学部であり、美術学部と同じ専門領域である。したがって、アドミッション・ポリシーは、基本的には美術学部と同一である。夜間学部の独自のポリシーとして多くの社会人を受け入れていることを大学共通項目に次の項目を加えて明示している。

- ・社会人としての経験を活かす意欲のある人（造形表現学部のみ）

なお、造形表現学部については、2014（平成 26）年度から学生募集を停止しており、2015（平成 27）年度は 3 年次編入学試験のみ実施した。

＜4＞ 美術研究科

アドミッション・ポリシーは、基本的に両学部と同一である。共通項目に加え、次の項目を独自のポリシーとして明示している。

- ・高度な創作・研究活動を探求する人（美術研究科のみ）

（2）学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学者選抜を行っているか。

＜1＞ 大学全体

受け入れ方針に基づき、入学試験種別ごとに「入試コンセプト」を設定し、受験生に向けて「目的や特長」、「必要とされる能力や知識、適性」を提示している（資料 5-1（一般入学試験） p.4 ほか）。

入学試験内容の変更は、前年から各学科の意見聴取や担当者による分析を行い、試験科目の変更や試験方法の改善を入学試験運営委員会や大学院教務委員会にて検討し、入学試験委員会で提案、承認される。さらに各学部の教授会と大学院委員会で審議され、決定される。複数回による委員会や会議にて、変更の必要性において大学の総意を確認しながら見直しを行っている。変更が決定した場合、学生募集要項や受験生向けの「入試ガイド」、本学ホームページ等に明確に掲載（次年度予告も含む）している（資料 5-3 p.16 ほか）。併せて全募集要項において専門試験（実技試験）の科目ごとに「採点基準」を列記し（資料 5-1（一般入学試験） p.12 ほか）、また、「入試ガイド」では一般入学試験と推薦入学試験の「実技問題出題のねらい・意図、採点のポイント」を明文化している（資料 5-3 p.18 例：絵画学科日本画専攻）。その他入学試験種別については、Web サイト内に「ねらい・意図、採点のポイント」の項目を過去 9～10 年にわたり設けることで公正に情報を公開している。「入試ガイド」においてもデジタルパンフレットとして過去 15 年分を Web サイト内に公開している。

また、「国語」や「英語」といった全学科共通の学科試験及び専門試験の採点時には受験生の氏名を隠し、仮番号をふるなど徹底しており、公正な入学試験を実施している。

＜2＞ 美術学部

【一般入学試験】

一般入学試験では、学科試験と専門試験による一般方式とセンター I 方式、学科試験のみのセンター II 方式（環境デザイン学科、芸術学科のみ）の 3 方式を実施している。センター I・II 方式では学科試験を大学入試センター試験で受けることにより、地方の受験生への負担軽減にも繋がっている。

また、募集人員比率も一般方式とセンター I・II 方式は 2012（平成 24）年度より約

6対4としている。一般方式の学科試験は、長期間にわたる入学試験において試験日を2日（A日程・B日程）設定しており、いずれか1日を受験すればよいとしているが、両日程受験することも可能である。両日程受験した場合は、高得点の科目を該当科目として採用している。

試験日程についてはファインアート系とデザイン系の学科に大別し、それらの日程が重複しないようスケジュールを組むことにより、同系列の学科の併願を可能としている。また、志願する学科で上記の方式の併願も可能である。このように、ニーズに応えた受験機会を受験生に向けて提供している。

専門試験においては、美術大学という特性から1科目5時間試験を基本（一部の学科専攻で6時間試験と3時間試験）とし、2科目試験（一部の学科で1科目試験）を課すことで実技を重視している。

一般入学試験では入学者全員と受験者のうち希望する者には、受験科目全ての成績を開示することと募集要項に「原則、受験科目全ての総合点により判定する。ただし、受験科目のうち一定の点数に及ばない科目があれば、総合点が高くても不合格または補欠となる場合があります。」と記載することで、入学者選抜の公平性と公正性を担保している（資料5-1(一般入学試験) p.16)。

[外国人留学生入学試験]

美術に対する思考や日本語能力をはかるため「小論文」「面接」を試験科目とし、実技力をみるために、各学科独自出題による専門試験（芸術学科は小論文）を行っている。

[帰国生入学試験]

美術に対する考え方や日本語での表現能力をはかるための「小論文」「面接」と、各学科における実技の力を見るための専門試験（芸術学科は小論文）を行っている。

[推薦入学試験]

推薦入学試験は彫刻学科と工芸学科で自己推薦入学試験、芸術学科と演劇舞踊デザイン学科演劇舞踊コースで公募制推薦入学試験による募集を行っている。それぞれ2005（平成17）年度と2014（平成26）年度より導入された比較的新しい入試種別である。

自己推薦入学試験では現役生が対象となる。一方、公募制推薦入学試験では高校卒業後1年まで出願資格が与えられ、指定した基準以上の評定平均値や学校長の推薦を要する等条件が課される。これらにより、受験生の高等学校課程における実績や勤勉を勘案し、また、試験科目に加え自薦や専願の意志を確認している。

両推薦入学試験とも実技を重視しており、試験科目として、「立体造形・デッサン」（彫刻学科）、「鉛筆デッサン『静物』」（工芸学科）、「小論文」（芸術学科）、「身体表現」（演劇舞踊コース）を課し、提出資料・課題を出願時に彫刻学科、工芸学科、芸術学科で課している。

[3年次編入学試験]

思考力や大学教養課程修了程度の学力を「小論文」「面接」ではかり、ほとんどのデザ

イン系の学科では実技力を見るために「専門試験」（芸術学科においては専門試験として「小論文」）を課している。また、2年次修了までのレベルに到達しているかを「提出作品」で確認している。なお、出願資格では、出身校を美術系大学に限定せず、他分野からの編入希望者にも門戸を開いている（ただし、一部学科で特定の資格に関する受験資格を与える関係上、出身大学の学部・学科が本学の教育課程に準じていることが必要）。

＜3＞ 造形表現学部

〔3年次編入学試験〕

前述のとおり、造形表現学部の募集停止に伴い、2015（平成27）年度3年次編入学試験まで受け入れを行った。試験では「面接」で志望動機や思考力をはかり、「提出作品」で2年次修了までのレベルに到達しているかを確認した。

＜4＞ 美術研究科

博士前期課程（修士課程）では、美術に対する考え方、大学卒業程度の学力をみるための「小論文」「面接」（芸術学専攻については「英語」も課す）と、高度な専門分野の力をみるための「提出作品（論文）審査」を課している。

また、2014（平成26）年度から、学外からの博士前期課程（修士課程）志願者に向け、自身の研究計画内容と教員の研究テーマの適合を知る機会の提供を目的として、事前面談の申込窓口を本学 Web サイトに設けた。

なお、2015（平成27）年度をもって募集を停止したが、当初の社会人再教育というニーズに適切に応えるべく、絵画専攻日本画・油画研究領域、デザイン専攻コミュニケーションデザイン研究領域、芸術学専攻身体表現研究領域においては、上野毛キャンパスに夜間主コースを設置している（コミュニケーションデザイン研究領域・身体表現研究領域は夜間主コースのみ募集）。

博士後期課程の試験科目は、細分化された個々の領域における研究内容をみるために「提出論文」及び「提出作品（創作系志望者のみ）」とともに、それらを包括的に編成した総合的な学問とのバランスをみるために「語学」「小論文」「口頭試問」を課している。また、「受験前における教員との事前確認」を行うことで、博士前期課程の面談と併せて本学に関して情報量が少ない学外者にも、選抜に向けた準備を公正に提供している。

（3）適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

＜1＞ 大学全体

美術大学であることから、学生一人あたりの制作スペースを確保することが最も重要であり、収容定員が設定されている。美術学部においては一般入学試験、外国人留学生入学試験、帰国生入学試験、推薦入学試験の入学手続き状況で調整を行っている。また、学科ごとの過去の補欠繰り上げ状況や広報活動により得られる志願者動向を踏まえ検討を重ねることで、適正な定員を確保するようにしている。これは過去5年間の入学者数比率にお

いて1.08～1.10というほぼ一定幅で推移していることからわかる。

「3年次編入学試験」「転学部転学科試験」では、いずれの学科も定員を「若干名」としているが、これも学生1人当たりの制作スペースを考慮の上、欠員のある学科ごとの募集に基づくためである。

<2> 美術学部

美術学部の収容定員に対する在籍学生数比率は、美術学部は3,460名に対し1.09となり適正な数値を保持し続けている。なお、2014（平成26）年度からは、収容定員4,060名となり、3,759名の在学者による比率は0.93となるが、これは統合デザイン学科と演劇舞踊デザイン学科の完成年度を迎えていないためである。

美術学部の過去5カ年の入学定員・入学者数比率の平均は次の表のとおりとなる。

年度	入学定員	入学者数	比率
2010年度	815	899	1.10
2011年度	815	891	1.09
2012年度	815	880	1.08
2013年度	815	886	1.09
2014年度	1,015	1,104	1.09
平均			1.09

<3> 造形表現学部

造形表現学部収容定員に対する在籍学生数比率は、800名に対し0.85の678名（※2010(平成22)年～2013(平成25)年の4年間）であり、入学定員を割る状態での減少が続いていたが、2013（平成25）年度においては上昇した。

造形表現学部の過去5カ年の入学定員・入学者数比率の平均は次の表のとおりとなる。

年度	入学定員	入学者数	比率
2010年度	200	188	0.94
2011年度	200	181	0.91
2012年度	200	144	0.72
2013年度	200	165	0.82
2014年度	—	—	—
平均 ※			0.85

<4> 美術研究科

博士前期課程（修士課程）の収容定員に対する在籍学生数比率は、274名に対し0.95の240名、博士後期課程が21名に対し0.48の10名となり、低い水準といえる。

博士前期課程（修士課程）及び博士後期課程における過去5カ年の入学定員・入学者数比率の平均は次の表のとおりとなる。

博士前期課程（修士課程）

年度	入学定員	入学者数	比率
2010年度	134	145	1.08
2011年度	134	127	0.95
2012年度	137	130	0.95
2013年度	137	119	0.87
2014年度	137	121	0.88
平均			0.95

博士後期課程

年度	入学定員	入学者数	比率
2010年度	7	8	0.88
2011年度	7	7	1.00
2012年度	7	4	0.57
2013年度	7	3	0.43
2014年度	7	3	0.43
平均			0.71

(4) 学生の募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適正に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

<1> 大学全体

入学試験におけるアドミッション・ポリシー、入学試験の構成、採点基準や日程等の重要事項は、学長を委員長とし、教務部長、各学部長、研究科長、学長の指名する者若干名、教務部事務部長、入学センター長及び入学センター入試課長で組織される入学試験委員会で審議され、学内の連絡調整が行われる。また、委員長を教務部長とし、各学科より選出された者各1名、教務部事務部長、入学センター長、入学センター入試課長で組織される入学試験運営委員会が置かれ、入学試験実施運営に関する事項を審議している。さらに入学試験期間においては、本部長を教務部長、入試事務局長を入学センター長とし、入試課長・入試広報課長で構成される入学試験実施本部が組織され、万全を期す体制を構築している。

入学試験運営委員会においては、試験が円滑かつ公正に行われるよう、「入試問題作成における注意事項」（資料 5-4）や「面接試験における注意事項」（資料 5-5）をチェックリスト形式で教員向けに注意喚起している。加えて災害時にも対応できる「危機発生時フローチャート」（資料 5-6）を教職員に向けて周知することで、危機発生に備えた指示系統を明確にしている。

<2> 美術学部

入学試験運営委員会は定期的を開催しており、学生の受け入れについて検証を行っている。併せて志願者動向も報告している。入学試験委員会については重要事項（採点方法、点数化、個別の出願資格審査等）や大要を決める際に開催する。

＜3＞ 造形表現学部

3年次編入学試験が行われた2014年度までは入学試験運営委員会を開催しており、学生の受け入れの検証を行っていた。また、美術学部と同様に入学試験委員会については大要を決める際に開催していた。

＜4＞ 美術研究科

大学院教務委員会の中で入試に関係する事項を定期的に審議、検証している。また、入学試験直前、結果報告や大要を決める際には入学試験委員会を開催する。

2. 点検・評価

●基準5の充足状況

学生の受け入れ方針を多種の刊行物や本学ホームページで公表することで、入学前の受験生の指針として役立っているといえる。併せて「入試コンセプト」で特徴づけられる複数の入学試験を各委員会で検討することや、受験生に「採点基準」を含め傾向や対策を提示することは公正かつ適正な実施を可能にしている。また、在籍学生数を加味しながら収容定員に基づき受け入れの人数を設定していることや、定期的に各委員会で検証を行っていることから、同基準をおおむね充足している。

① 効果が上がっている事項

＜1＞ 大学全体

合格発表率（合格者÷募集人員）が1.94倍にとどまるという数値は、本学を第一志望としている受験生が多いことを証明しており、実技試験を実施しない美術大学が増える中、一般入学試験のみならず推薦入学試験においても実技試験を重視することで、その受け入れ方針にやりがいを感じる受験生が多い結果と捉えることができる。

入学試験の変更内容、入試参考作品、採点基準、ねらい・意図を記載した「入試ガイド」の有料販売から無料配布への切替えや内容を本学Webサイトにて公開していることは、受験生が本学の入学試験を把握する良い機会となっている。また、2013年度より本学Webサイトを大幅にリニューアルし、受験生向けのコンテンツの充実に力を入れることで利便性の向上に繋げることができた。一般入学試験志願者アンケートにおいても「これまで見た（読んだ）ものは何ですか。」という問いに対し、「ホームページ」が82.5%、「入試ガイド2014」が82.1%、「大学案内」が77.4%という回答が得られ、高い数値結果となった（資料5-7）。加えてオープンキャンパスや高等学校教員を対象にした説明会・見学会、各地方で行われる進学相談会といった広報活動に力を入れることが実を結び、多くの来場者数や志願者数の増加等効果が表れている。

オープンキャンパスにおける過去5カ年の来場者数

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
来場者数(名)	6,506	7,104	6,966	6,983	6,518

進学相談会における過去5カ年の来場者数

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
来場者数(名)	4,650	4,481	4,219	4,738	10,824

※ 2014年度は本学での開催はオープンキャンパスと同時開催に変更した。

＜2＞ 美術学部

美術学部の定員設定については、過去5カ年において入学者数比率が1.08～1.10という推移にあり、適正な定員を確保できている。

2014（平成26）年4月より2学科を上野毛キャンパスに新設したことで、受験生の多様な要望に応える新しい教育の実践を開始したことも、学部全体の志願者の充足に貢献する結果となった。

また近年、推薦入学試験など入学試験種別や一般入学試験内での方式を増やしたことにより、受験生にとって受験機会が増え、志願者数が比較的少ない学科でも増加に転じたことは、充足要因の一つと考えることができる。

＜3＞ 美術研究科

他大学出身者を対象に出願期間前に行う事前面談については、2014年度より本学 Web サイトで受付を開始した。入学後のミスマッチを防止することを含め、教員と受験生の研究内容の確認に大きく貢献していることが問い合わせや面談申込件数の増加といった効果に表れてきている。

② 改善すべき事項

＜1＞ 大学全体

受け入れにおいて学内での併願や方式を増やした結果、受験機会は増加した。全国的美術系大学において志願者減の動向があるなか、本学への志願者実数もまた減少傾向にある。

＜2＞ 美術学部

外国人留学生試験において、日本語の理解不足により授業についていくことができず支障をきたしているといった報告も見受けられ、検討課題となっている。

＜3＞ 美術研究科

博士前期課程（修士課程）及び博士後期課程については定員割れが生じ、望ましくない充足状況となっている。また、受け入れもデザイン専攻においてはアジア圏からの外国人留学生が大半を占めており、多くの国々から志願者が集まっていないといった課題がある。

3. 将来に向けた発展方策

① 効果が上がっている事項

<1> 大学全体

本学は美術大学であり、実技試験を重んじていることから、アドミッション・ポリシーからの入学試験における学科等別の専門試験ごとの採点基準を、受験生に向けて具体的に明示している。これは高等学校で履修すべき科目として「美術」が選択科目であることから便宜を図ったものである。

今後もアドミッション・ポリシーや基本理念を明示する印刷物や Web サイトをより充実させ、受験生に向けてわかりやすく発信することで、より優秀な受験生の獲得を行う。

入試広報面において、本学のオープンキャンパスは例年来場者から高い評価を受けている。イベント内容には参加型授業やワークショップの充実、高大連携授業等があるが、2014（平成 26）年度は進学相談を同時開催にしたことでさらに盛況であったことから、今後も地方進学相談会と併せて受験生のニーズを考えた、より充実した広報の機会を提供していく。

<2> 美術学部

受け入れにおける入学試験種別の多様化や入学試験科目での実技重視の態勢が入学後に活かされ、作品の独創性やレベル向上に良い結果をもたらしている。

また、入学後も教務部や学生部と連携し、学生生活調査等から検証を絶えず行うことで、ミスマッチについては学内での転学試験を案内する等学生の要望に応じていく。

<3> 美術研究科

美術学部と同様に、入学試験時における作品提出を重んじることが受け入れ後に活かされ、研究や創作活動にも好影響を与えている。

② 改善すべき事項**<1> 大学全体**

受験者が芳しくない学科の対応強化が求められる。併せて高校生で進路先が漠然としている者や興味はあるものの他分野の大学を志す受験生に向けて、アートやデザインの魅力を伝えていくことが学内はもちろん美術系大学共通の課題といえるので、総合大学系や工学系の進学相談会にも積極的に参加をしていく。

<2> 美術学部

外国籍の受験生に例えば「日本留学試験」といったように共通の試験を課すことで、日本語能力の指標となるものを設定することが急務である。勘案の材料にすることを受験生に周知することで、入国前に少しでも日本語能力を上げる動機づけにしたい。

<3> 美術研究科

国際的視野を備えた人材育成のためにも、多くの国々から志願者が集まるよう進学相談等の取り組みを行い、欧米や自国からの志願者獲得を目指していきたい。

4. 根拠資料

5-1 2014 年度 学生募集要項（一般・特別・大学院）

- 5-2 多摩美術大学 大学案内 2015 (既出 1-3)
- 5-3 多摩美術大学 入試ガイド 2014
- 5-4 入試問題作成における注意事項
- 5-5 面接試験における注意事項
- 5-6 危機発生時フローチャート
- 5-7 2014 年度志願者アンケート (一般・特別入試志願者)